佳作

私の夢

青森県弘前市立新和中学校
２年　葛西　妃莉

10 年後の私は、どうしているだろうか。夢だったＣＧデザイナーになっているだろうか。

私は、青森県弘前市に住んでいます。私が通っていた弘前市立小友小学校は、少子化に伴い令和３年３月に、133 年という長い歴史に幕を閉じました。この小学校には、私の祖父や父も通っていて、小友地区に住む人にとっては、たくさんの思い出がつまったかけがえのない場所だったと思います。

小学校の頃を思い返してみると、まず一番にうかぶのは、校庭の景色です。春には、校庭の大きな桜がピンク色に染まり、夏には、熱い太陽に負けず青々とした草木が茂る。秋には、向こうに見える岩木山が真っ赤に紅葉し、冬には見渡すかぎりの銀世界に変わる。この景色は、私が６年間通った中で変わらないもので、毎年見ても飽きることなどありませんでした。

次に思いうかぶのは、小友小学校で何年も続いてきた「ねぷた運行」です。全校児童が参加して、１・２年生は自分たちで作った可愛い金魚ねぷたを持ち、３・４年生はリコーダーで囃子を吹き、５年生がねぷたを運行、６年生が太鼓を叩きます。小友地区を１周するのでとても疲れますが、沿道にたくさんの人たちが見に来て、一緒に「ヤーヤドー」と叫んでくれます。小友全体が一つになる行事です。なかでも、私の一番の楽しみは、運行終了後のアイスでした。暑くて疲れているのにみんな笑っていて、アイスも本当においしかったです。

最後にうかぶのは、小友小学校にしかないもの。前庭にある「希望の鐘」です。昔、チャイムがなかった時代に、鐘を鳴らして時間を教えていたのだと、５・６年の時の担任の先生から聞きました。私たちは、よく下校時に鐘を鳴らし、その音を聞いてから帰っていました。あの頃は、鐘を鳴らすことを当たり前のように感じていましたが、閉校した今、校門から入ることはできず、二度と鐘を鳴らすことができなくなりました。

平成７年に新校舎となり、最初の卒業生が私の父、そして最後の卒業生が私でした。何か、縁があるような気がして仕方ありません。いつの時代にも、親から子、子から孫へと続いていくものがあるはずです。私は、祖父と父と共有している小友小学校の思い出を、残していきたいと強く思っています。小友という地区のこと、小友小学校のことを、たくさんの人に知ってもらえれば、いつか忘れ去られてしまうこともないはずです。

とはいっても、どうすればいいのか、方法がわかりません。そんな時、学校の総合学習で「職業調べ」があり「コンピュータグラフィックデザイナー」という職業を知ったのです。小友小学校の素晴らしさは、季節によって変化する色とりどりの風景です。もう入れない校舎とそこから見える風景を、２次元や３次元で再現し、映像などにできたら、世界中の人に私の故郷の美しさを感じてもらえるのではないか……。なんだか、未来へ続く道が見えたようで、今の私は、コンピュータの勉強や専門の知識の勉強など、やりたいことがあふれているのです。

これから先も、少子化、そして過疎化によって閉校する学校は増えていくでしょう。これは、東北だけでなく全国で共通する問題なのかもしれません。簡単に解決することはできないので、寂しい思いをする人も増え続けていくと思います。そんな人たちのためにも楽しかった思い出、つらく悲しかった思い出、全てを含めて一生の宝物になるように、目に見える形になるものを、私はつくってみたいのです。故郷に貢献したいという気持ちが私の背中を押してくれて、将来の夢が決まりました。

10 年後の私は、どうしているだろうか。夢だったＣＧデザイナーになって、楽しく働いているだろうか。10 年後の故郷はどうなっているだろうか。今の私には、見当もつきません……。もし、未来の私に困難があったとしても、常に前向きでいてほしい。もし、未来の私が自信をなくしてくじけそうになったとしても、故郷の風景の美しさと、故郷に貢献したいと思ったことを忘れずに頑張ってほしい。

けっぱれ、妃莉！